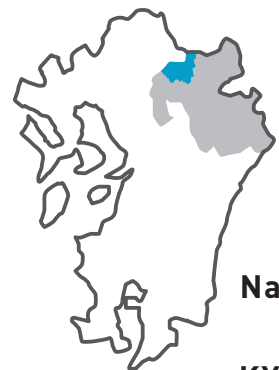


中津暮らしのすゝめ



**Encouragement
of Living
in Nakatsu**



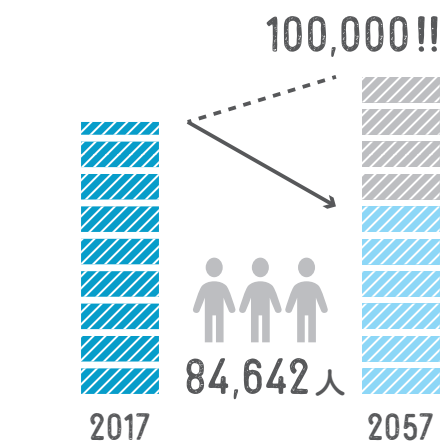
**Nakatsu
OITA
KYUSHU
JAPAN**

中津暮らしのすゝめ

中津市の「いま」「みらい」 —目指せ10万人—

現在、中津市の人口は約8万5千人、40年後には6万人になる試算がされています。人口減少は、各種行政サービスの低下や雇用の縮小など、様々な悪影響を及ぼし、我々が住み暮らす中津を衰退させる原因となります。

2013年、中津青年会議所は中津の未来の航海図として「グランドデザイン for なかつ」を創りました。その中で掲げた「中津人口10万人構想」では、みらいの中津がより豊かで魅力あふれるまちであるためには、人口減少に逆行し、人口増加のための運動の展開が必要であると考えました。



本年、私たちは人口問題の解決の切り口として中津市への移住・定住を促進するために、本誌「中津暮らしのすゝめ」を発行する運びとなりました。

本誌を作成するにあたり、全国の移住希望者300人（20-60代の男女）にアンケートを取り、移住者が求めているものをリサーチしました。私たちが考える移住・定住推進運動のみらい、「あったらいいな」が詰まった本誌をいろいろな方々に読んでいただき、市民・行政・企業・各種団体、一人でも多くのひとが中津のみらいを考えるきっかけになれば幸いです。

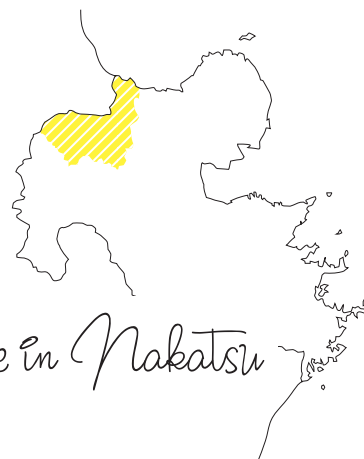


三光 Sanko

地元の兵庫でFXや貿易関係の仕事をしていましたが、大学時代からの彼女が中津出身というきっかけで中津市三光へ移住し、地域おこし協力隊になりました。市から借りている空き家で広々快適に暮らしています。近所の方とのやりとりが楽しく、よく果物や野菜をいただきます。前職はPCとネットがあればどこでも仕事ができただけで、今は地域の方々と触れ合いつながりながら仕事をするのが多くなりました。人との出会いを通じて郷土愛を感じています。中津市三光は、自然豊かで人も優しくとても溶け込みやすいです。日々の挨拶や地区の行事である草刈りや集会などに参加したら、すぐに仲良くなれる風土があります。

梅田尋平さん 兵庫県出身
地域おこし協力隊

中津に
暮らすひと



People in Nakatsu



本耶馬溪 Honyabakei

香内宏文さん 福島県出身
亜細亜食堂 c a g o

栃木県・那須塩原市でレストランを営んでいましたが、東日本大震災の原発放射能問題により九州へ来ました。そして知人に紹介された中津市本耶馬溪町の大自然に囲まれた場所に魅了され移住を決めました。自然のなかで暮らしているとなんと物がシンプルに見えるようになってきました。家族と過ごす掛替えのない時間やエネルギーの大切さを感じ必要な電化製品を無くし、体に優しい環境での生活を仕事にも取り入れ、自然体でいられる時間をこれからも大切にしていきたいと思っています。移住するには、自分の価値観に固執しないことと、そこに住む人と触れ合うことを自ら進んで行ってあげれば必ず受け入れてくれると思います。



青の洞門

耶馬溪の名勝・競秀峰の裾野にある全長約342mの洞門。江戸時代、旅の途中の禅海和尚が30年余りをかけて手作業で掘ったトンネル。菊池寛の短編小説「恩讐の彼方に」のモデルにも。

亜細亜食堂 c a g o

中津市本耶馬溪町曾木459-9 0979-52-3004



耶馬溪 Yabakei

福田まやさん 奈良県出身
グラフィックデザイナー

もともとご縁があり中津市耶馬溪に幼い頃から毎年遊びに来ていました。いつかは耶馬溪にと、東京や関西で修行したあと夫と共に移住してきました。福岡や市内で打ち合わせをして、自宅デザインをしています。自然の中での半自給自足暮らしは開放的で、四季折々の恵みであふれています。子どもたちを近所のおじいちゃんおばあちゃんが孫の様に可愛がってくれ、ゆったりと子育てできるのも幸せです。また地区の行事やお祭りなど、街にはない風習があり、人数が少ない分、深く関わることが出来ます。5年経った今も飽きることはありません。移住する際には、ぜひ地域行事などに積極的に参加してみてください。



下郷農協や旬菜館の野菜

下郷農協は中津市耶馬溪町にある旧下郷村の思いを受け継ぐ小さな農協で、自分たちで食べるものは自分たちでまかなおうという想いから、無農薬での生産から加工販売までを自らが運営して行っている。旬彩館は、耶馬溪の物産品のみを販売している生産者直売所。



山国 Yamakuni

左藤晃貴さん 大分県九重町出身
(公社) 農業公社やまくに

農業高校、農業大学を出て中津市山国の農業公社に就職しました。大自然はもちろん川や滝が優雅に流れていて水が美しいところが大好きです。一人暮らしで自炊が大変ですが、食材が全て新鮮でおいしい、そして安い！家賃も手頃で快適です。映画館・図書館、冬はアイススケート場もあります。

本多岳樹さん 大分県宇佐市出身
(公社) 農業公社やまくに

同じく就職で移住しました。地元と違って山間なので気候がころころ変わることには驚きました。近くの魔林峡によく散歩がてら涼みに行きます。地域の方もとても優しく、心豊かに暮らしています。田舎なので不便なところもありますが、自分なりに工夫してより良い生活にしていくなのが醍醐味です。



猿飛千壺峡・魔林峡

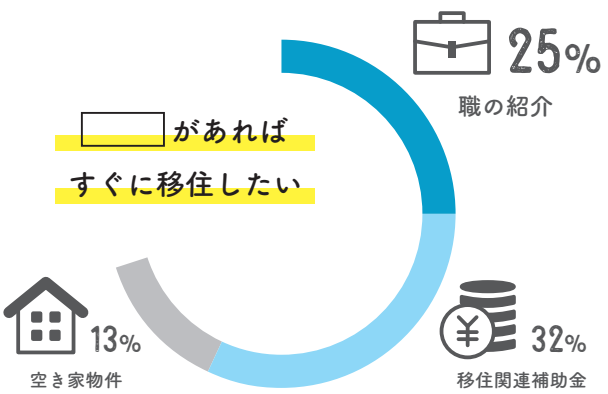
長い時間をかけて自然がつくった無数の甕穴(おうけつ)が広がり、岩肌の間を川が流れる。山国川の上流にある、自然の素晴らしさを満喫できるスポット。また下流にある魔林峡は、山国の「高千穂」とも称され四季折々の神秘的な美しさを見せてくれる。



いといろ
 色んな人の持つ色が糸のように紡がれるようにシェアオフィス・カフェ・貸スペースが併設。
 中津市1776番 0979-31-0401
www.itoiro3.com

移住希望者へのアンケートから、「仕事」に関わることに多くの興味をもっていることがわかりました。地方への移住にあたり、そこでどのように働き、お金を稼ぐかは非常に重要です。これからの移住推進の中で「中津にはこんな仕事がある」としっかりアピールする必要があります。

移住 × 仕事 employment



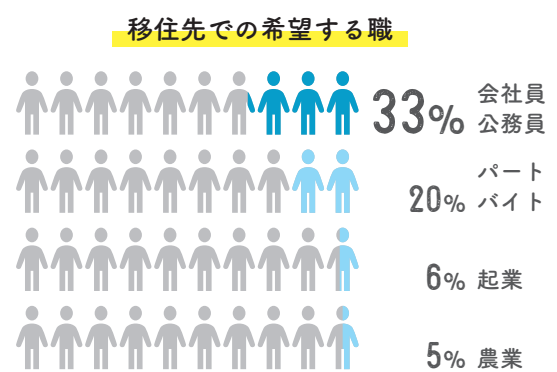
空き家バンクを利用した体験型インターン

移住希望者の要望として、移住に関する体験をしてみたいというアンケート結果がでています。移住先を選定する上で、インターンネットや移住フェアなどで知識や情報を得るだけでなく、実際の移住先の様子や雰囲気を実感することが非常に重要です。移住後のトラブルやギャップを予防し、仕事と生活の体験が出来るシステムの構築が必要です。

具体的には、空き家バンクを利用した体験型インターンの充実を図ることが、これらの問題を解決する近道であると考えます。

実際に中津に家族とともに住み暮らしてみても、地元の雰囲気やルール、隣接者とのつながりを感じてもらい、それに加え、移住先での仕事や通勤等の体験してもらいましょう。空き家から実際に仕事場に通勤したり、子育て環境や地域を実感してもらうことで、周辺の人と知り合いになってもらうことが大切です。

移住の体験を提供する側としては、農業・林業・水産業等の第一次産業のイメージが強くなりがちですが、意外にも会社員や公務員を希望する移住者の割合が多いことに注目しなければなりません。中津にある地元の企業が発信する求人が移住者にとっては非常に大切であるということになります。



サテライト・オフィス

企業本社や官公庁・団体の本庁舎・本部から離れた所に設置されたオフィスのこと。

テレワーク

情報通信機器等を活用し時間や場所の制約を受けずに柔軟に働くことができる形態。



自然が豊かな環境で暮らしたい



41/300

中津へ移住してもらうために、仕事の受け皿としての求人も移住者を意識したものにすることがあります。現在の中津の企業の多くは旧市内に拠点を構えて生産活動をしていますが、移住者は自然豊かな環境での暮らしを求めています。旧下毛地域の自然環境はこれらのニーズを捉えており、「旧下毛地域に住みながら、仕事ができる環境」を構築し、アピールでき

中津企業の働き方改革

みらいに向けて

なぜ移住したいですか？



44/300

自分や配偶者の出身地



37/300

友人知人がいる



13/300

やりたい仕事がある



11/300

子どもに適した環境

れば移住希望者の選択肢が広がります。具体的には、旧市内に存在する企業が、旧下毛地域に支店を開設し、雇用者を受け入れる体制を整えることとなります。支店といつても、オフィスを新築する必要はありません。サテライト・オフィスやテレワークの導入により、仕事の機能自体を各家庭や、空き家などに集約できます。

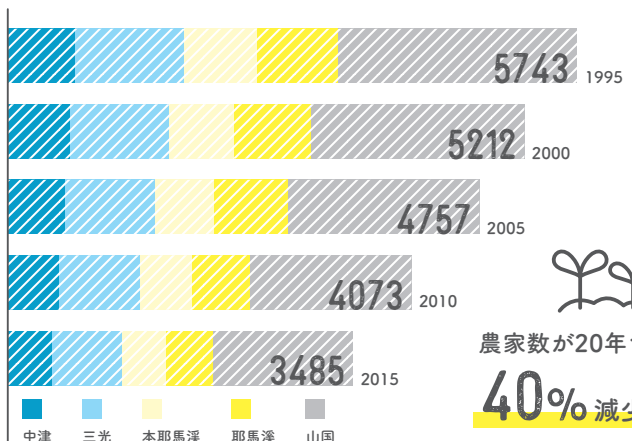


農家と働き手を結び

農作業ヘルパー登録派遣制度

中津の農業従事者数は減少の一途を辿り、なおかつ高齢化が進み、農業の担い手不足が深刻です。一方、東日本大震災以降、農業や食の安全に興味を持つ人が増え、特に下郷地区にある下郷農協は、消費者と連携し、利益よりも自給優先の生産と生活をテーマに健康で人間らしい暮らしを推奨、これに惹かれた下郷への移住者は年々増加しています。農業は、担い手不足でありながら、関心が高いという非常にチャンスに溢れる

分野であるといえます。農作業は、膨大な労力が必要です。農業に興味のある人に、農業ヘルパーとしてインターネットで登録してもらい、農作業の体験ができる制度の構築を目指しましょう。それにはウーフ制度が参考になります。インターネットを利用した登録制の農業体験システムにより、農家の負担軽減と農業体験を同時に行うことができ、将来移住し、農業に従事するという選択肢を広げることができます。



農家数が20年で
40%減少

「住」と「職」を紹介

一つの窓口で

移住者の皆さんは、移住フェアや空き家バンクを通じて中津の「住」に対しての問い合わせをしても、同じ窓口で「職」に関する情報を得ることはできません。ハローワークと空き家バンクを連携させ、「この地域ならこの仕事が可能」というような紹介にすることが重要です。先に述べた中津企業の職の改革によるサテライト・オフィスやテレワーク等の政策と共に、空き家とセットで仕事を紹介していくことが移住者の選択肢を広げることに繋がります。また、同じ窓口(担当者)で空き家バンクの申請手続きから転入届、子育ての相談にいたるまで一貫したサービスの提供ができれば、移住希望者の利便性につながります。

Wwoof ウーフ

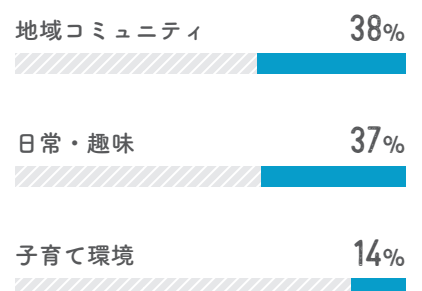
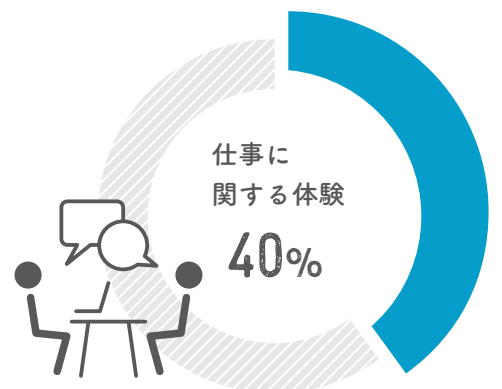
www.wwoofjapan.com

世界中の有機農場で様々な経験をすることを目的とした制度。有機農場が中心だが、その他農家民宿、農家レストラン、自然食品店、ギャラリー、ヨガ教室など受け入れ先のジャンルは多岐に渡る。

移住 × 人 community

移住を考えている人は、そこがどのような地域なのか、どんなお隣さんがいて、どんなルールがあるのかに興味があります。そしてこの情報を実際に得るためには、実際に現地へ行き、人と人とが交わって体験をするしかありません。移住の最終目標は、地域に溶け込み、地域の一員として当たり前で暮らしていくことです。地域の人から移住者のことを深く知り、移住者側も、移住先の地域のことを尊重しながら歩み寄る必要があります。

どんな移住体験を
してみたいですか？



ワークシヨップ 交流センターの設立

移住先のコミュニティに関する体験を推し進める方法として、すでに移住している先輩移住者との交流を、地元の人と一緒にできる機会の提供が挙げられます。移住に伴う不安感等の相談ができ、地域の当り前を最初から強要するのではなく、ワークセッション置いた相談できる存在として定期的な交流ができる施設が必要です。移住者同士でのコミュニケーションを充実させる場としても非常に有用な交流センターの存在は今後、地元の人と移住希望者にとって初めての接点となりうる非常に大切な場所となるでしょう。



移住と言っても、両親や親戚が生まれ育ったふるさとなどに縁があつて、中津に興味を持たれる方もいます。やはり、何の縁もゆかりのない土地へ移住するより、お正月やお盆に中津へ訪れている方で、既に中津に興味を持たれている人に背中を押してあげることが大切です。先輩移住者方も、何らかの形で既に中津のことを知ってくれていた人が多かったです。両親が生まれ育ったふるさとへ子育てのために移住することを「孫ターン」といいますが、地域の活性化、子育て世代の定住を図れる非常に有用な方法です。補助金等の策定を視野に入れ、中津が「孫ターン推奨しています！」とアピールする必要があります。

Uターンとともに 孫ターン推進



Iターン

出身地とは別の地方に移り住む、特に都市部から移り住むこと



Jターン

地方から大都市へ移住した者が故郷近くの地方都市圏に戻ること



Uターン

地方から都市部へ移住した者が再び地方の生まれ故郷に戻ること

受入側の市民の こころづくり

移住者が移住したいと思っても、受け入れる中津市民側にも心構え、準備と情報が必要です。やはり、外から人を受け入れることは容易なことではなく、ついついあの移住者さんとはどんな人なのだろうと、身構えてしまうことも。外からの人が来ることに慣れていなければ当然の反応です。

これらを解決するには、なるべく外部の人とかかわる機会を増やすことが大切です。市民が自ら地域に興味を持ち、観光や農業体験や移住体験イベントなどに積極的な参加を協力してもらいましょう。そうすれば、住民同士の関係が深まるのももちろんのこと、移住希望者との距離が縮まります。外部の人の受け入れに慣れることで、開かれた中津に変わっていくことができます。その結果「この人が近くにいればいろいろ助かるのになあ」とか、「この人なら自分の仕事をまかせてもいい！」と思える人に出会いかもしれません。移住希望者としても「中津のあの人はいい人だったから、電話してみようかな」と直接相談の連絡を取り合えるような信頼感が生まれるようになれば、中津はより移住がしやすいまちになるでしょう。

移住者と地域住民の交流の場

Cafe & 雑貨 やまびこ

じつは、既に移住者との交流をコンセプトにつくられたカフェが中津市耶馬溪町柿坂にあります。カフェやまびこは、移住者らが共同で経営するカフェ。代表の中田充昭さんは東京都出身。東北の震災を機に、自分の生活についてしっかりと考えた結果、移住者の知り合いのいる中津市耶馬溪へ2013年に移住、農業に従事されています。農業以外にも、地域の人たちと共に暮らしていくことを大切にしながら、移住者と地域住民との交流を図れる場が必要だと思い、カフェやまびこを立ち上げました。人間らしい生き方ができ、忙しい中でも充実感を感じる毎日だという中田さん。

「例えば、風呂も薪から沸かしますが、大変ですけどその分満足感も高い。開放的でストレスも少ないです。耶馬溪に来て、自然や命に対する感覚・感性が深まりました。ただ、移住者はどうしても地元の方との距離が生じてしまいがちです。移住しようとする地域のことやみなさんを尊敬し、移住先の伝統や文化、人柄などを受け入れて、歩み寄る気持ちを大切にしています。」

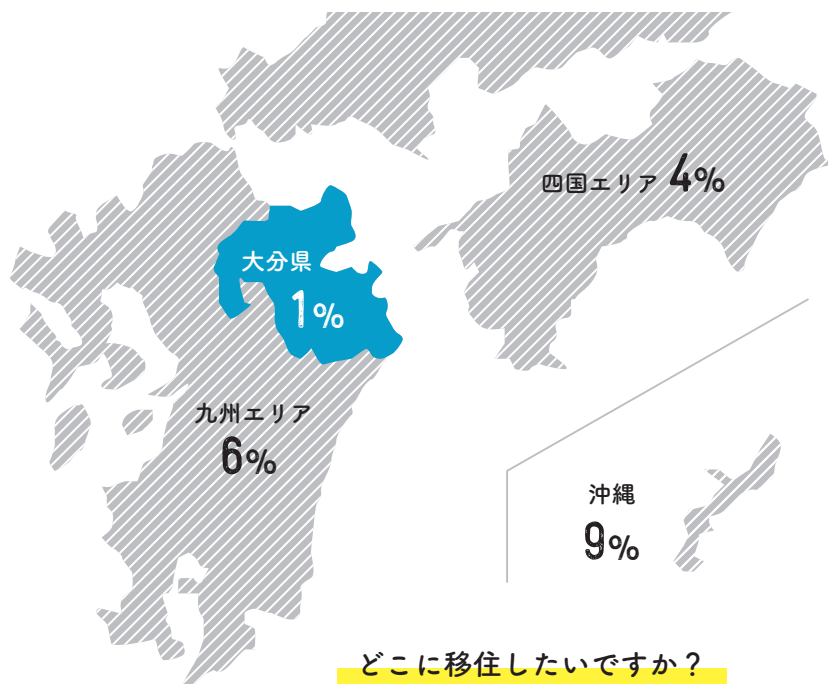
cafe&雑貨 やまびこ

移住者たちで立ち上げたカフェ。ワークショップやイベント、ライブなどが盛んに行われ移住者と地域住民の交流の場となっている。
耶馬溪町柿坂横岩47-3 0979-54-3848
www.facebook.com/yamabiko.yahhoo/



移住 × 発信

inform



どこに移住したいですか？

今回のアンケートの結果から、大分県へ移住の希望のある人の割合は1%という厳しい結果でした。数ある自治体の中で大分、そして中津への移住を考えてもらうにはどうすればよいのか。まずは、中津に「縁もゆかりもある人」に注目して、中津をもっと好きになってもらいましょう。そして、そこから移住の輪を広げましょう。

福井県鯖江市

地域活性化プランコンテスト

参加者が市長になったつもりで、鯖江をより良くするためのプランを考えるコンテスト。すでに開催は今年で10回目となり、毎回ストーリーミング配信される。今では全鯖江市民が注目するイベントとなっている。

地域活性化プランコンテスト
は、若者から行政施策を募集し、優秀作を実際の施策に取り入れる仕組みです。中津をより良くするためのアイデアを若者から募集することにより、彼らが中津のことをより深く知る機会になり、地域の未来に自分たちが直接影響できる実感を持ってもらえます。また、中津のみらいの活性化に本気で取り組むリーダーの発掘にもつながります。

この仕組みを実施できれば、中津が住みよいまちとなり、何よりも若者たちが中津を好きになり、仮に進学や就職しても、「いつかは中津に帰りたいな」と感じてくれるはず。地域の価値の発信方法として非常に効率的なプランコンテストを、移住者の受け入れの前提として実施しましょう。

市民参加型コンテスト 地域活性化プランの募集

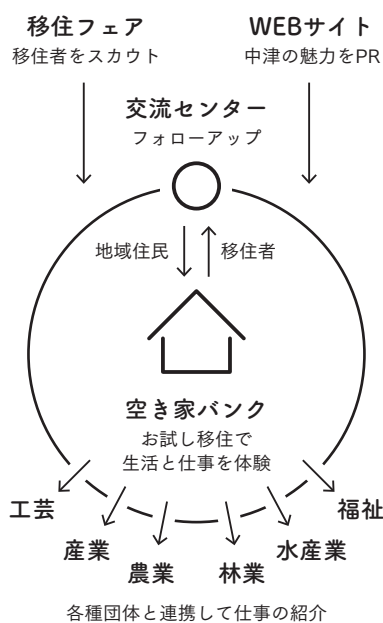
WEBで情報発信 移住と仕事をまとめて

移住希望者がまず情報をどこから取り入れるかといえば、WEBになります。観光などで中津を訪れた人、または、何かで中津を知り興味を持った人が、「中津移住」と検索したときに、一番上位に出てくるWEBサイトに情報をしっかりと集約させ、中津に興味を持った人の心を、移住する気持ちへと動かす仕掛けが必要です。

また移住希望者が検索しやすいキーワードを想定し、それに合わせた多角的なコンテンツ作りも必要です。(例・中津子育て、中津田舎暮らし、など) 空き家などの情報に加えて、それぞれの地域ごとの仕事や企業の紹介、自然豊かな環境の魅力、地域での暮らしが仮想体験できるようなページなどを展開していきましょう。

中津の企業経営者が 移住フェアで直接伝える

移住フェアは移住者にとって非常に有効な情報収集の場であり、多くの自治体の情報が一挙に集まり、注目度の高いイベントですが、主に移住担当や地域おこし協力隊等の行政側の職員の参加はあるものの、移住促進を目的とする地場企業の参加はありません。地元の企業はハローワーク等での人員募集が主流であり、コストの面からもわざわざ遠方の働き手に募集をかけていないのが現状です。そこで、自治体が主催する移住フェアなどに地場企業の経営者が参加し、地元の良いさを大いに語りながら、移住を前提とした職業紹介を行います。企業の経営者と移住希望者がマンツーマンで話し合うことができれば、それぞれに熱い想いが生まれます。



行政・企業・市民が
一体となり移住を促進

移住政策の波を 共に起こしましょう

本誌では、中津の移住について「あったらいいな」を3つの分野に分けて提案しましたが、これらを同時に実行できるかが、重要となります。今でもすでに、行政・企業・各諸団体・市民はそれぞれ移住者を呼び込もうと活動されていますが、それだけでは移住希望者には届きません。観光で中津に遊びに来た人が、中津に住んでみようかと思い、そして、中津で仕事をしながら暮らすことを考えてくれた時に、どこでも仕事ができる環境が、移住希望者の仕事の選択肢の幅を広げます。これは、育児や趣味等と仕事が両立できる可能性を高め、それが実質的な労

働力の確保へとつながり、地方で働く若者世代が増えます。その結果、地方にも外部からの人たちを受け入れる習慣ができ、活気に溢れたコミュニティが充実していくサイクルとなります。このサイクルを常に回し続けていくためには、行政・企業・各諸団体・市民が、次々と生まれくる波のように移住の働きかけをすることが必要です。各々が成すべきことを明確にし、得意分野ごとに、“同時に”移住政策を展開し、移住希望者に届けていきましょう。

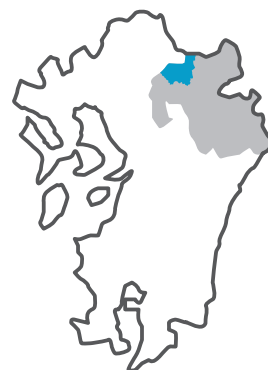
本誌「中津暮らしのすゝめ」が、誰もが住みやすい中津のみらいへ繋がる架け橋となることを願って。



耶馬溪橋（オランダ橋）

1923年竣工、青の洞門の下流にある。国内唯一の8連石造アーチ橋で日本最長の石造アーチ橋。地元ではオランダ橋という愛称で呼ばれ、橋の袂では「むかえる、さかえる、ぶじかえる」と台座に刻まれたカエルの親子像が見守る。

中津 Nakatsu



制作 公益社団法人 中津青年会議所

理事長 三宮 洋平

副理事長 一木 武志

地域再興戦略室 室長 衛藤 研太

地域コンファレンス発信委員会

委員長 白石 隆造

副委員長 元永 直樹

幹事 平早水 慎也

委員 秋成 洋平

委員 酒井 直樹



発行日 2017年10月16日

発行責任者 公益社団法人 中津青年会議所

編集 地域コンファレンス発信委員会

製作アドバイザー 岡山県特命参与（情報発信担当）
森本登志男

アンケート 株式会社マーシュ

写真 StudioVamos 野口修二

デザイン 星庭 福田まや

取材協力 中津市

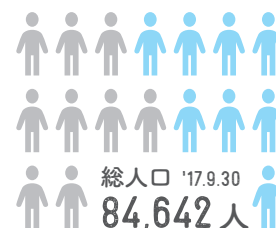
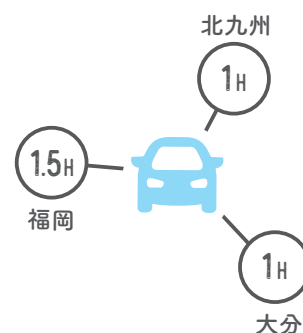
大分県まち・ひと・しごと創生推進室

大分県北部振興局

NPO法人ふるさと回帰支援センター

上毛町企画情報課

地域おこし協力隊



公益社団法人 中津青年会議所

〒871-8510 大分県中津市殿町1383-1

中津商工会議所3F

TEL 0979-23-2640 FAX 0979-23-2654

<http://www.nakatsujc.com>



合計特殊出生率
1.94

